

6. 地域の祭事にみる歴史的風致

(1) はじめに

本町には『元禄絵図』に描かれた集落があり、今もほぼ原形を保ちその姿を今に伝えている。その各集落には集落の守り神としての神社があり、集落を構成する人々が氏子となり、この氏子たちによって手入れがなされ、その時々^{その}に神への感謝、願いを伝える行事が行われている。

農耕祭事に直結した神社の祭事は、神社ごとに個性豊かな神事として執り行われているが、都市化が進行しつつある本町にあって、広がる田んぼの中を催行場とし多くの人が集う園部くんち、また、町域各地で子どもたちも参画するコモッタキが、他の地域では失われつつある人々の絆を確認する本町を特徴づける個性をつくり出している。

町内では、年間を通して様々な民間行事が、神社の祭事、家々のお祀りとして行われている。JR基山駅前や国道3号沿いに広がった宅地開発によって町外からの転入者が増え、都市化が進んだことを受け、催行する集落が減ってきているが、近隣自治体と比較すると、まだかつての姿をとどめ継承されている様子を見ることができる。そこに本町の人々の伝統的文化を大切に受け継ごうとする心の豊かさを感じることができる。

中でも、ホンゲンギョウやそれに附帯して執り行われる諸事は未だ多くの地区で残り、催行時に町の所々に立ち現れるその様子は、本町の貴重な個性をつくりだしている。

このような町内に残る祭事にみる歴史的風致について、それぞれの代表的なものを説明する。

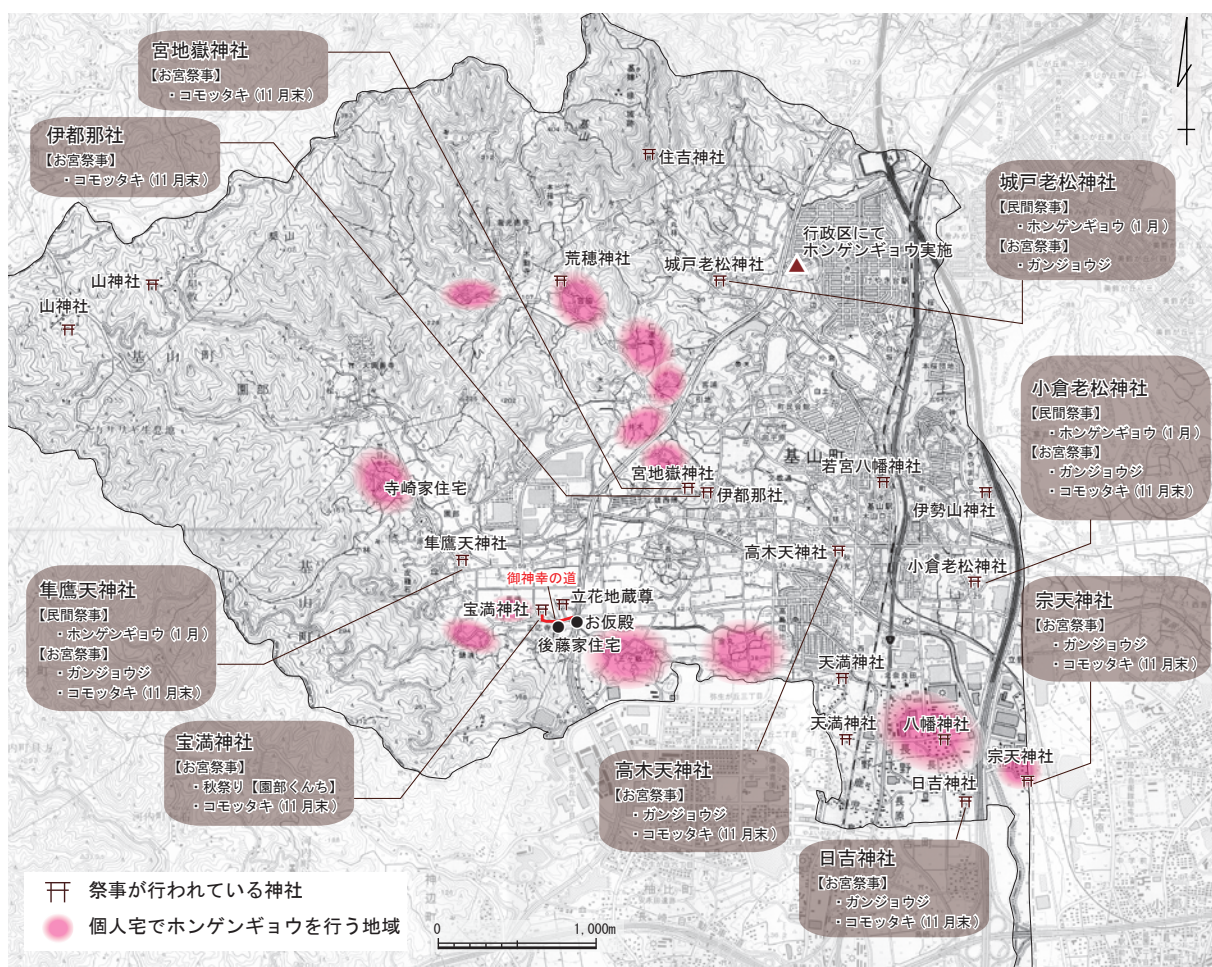


図 地域の祭事の位置

(2) 地域の祭事にみる歴史的風致

地域の祭事にみる歴史的風致は、下表のように示される。

		建造物と町並み	営み
地域の祭事にみる歴史的風致	1) 園部くんちにみる歴史的風致	●園部くんちにみる歴史的風致に関わる建造物と町並み ・園部くんちにみる歴史的風致に関わる建造物 (宝満神社 等) ・園部くんちにみる歴史的風致に関わる町並み	●園部くんち
	2) コモッタキにみる歴史的風致	●コモッタキにみる歴史的風致に関わる建造物と町並み ・コモッタキにみる歴史的風致に関わる建造物 (小倉老松神社 等) ・コモッタキにみる歴史的風致に関わる町並み	●コモッタキ
	3) ホンゲンギョウにみる歴史的風致	●ホンゲンギョウにみる歴史的風致に関わる建造物と催行の場の環境 ・ホンゲンギョウにみる歴史的風致に関わる建造物 (寺崎家住宅 等) ・催行される場の環境	●ホンゲンギョウ ・ホンゲンギョウ ・きんどの守り ・お荒神さまのお餅焼き

1) 園部くんちにみる歴史的風致

10月17日(現在はこの日に近い日曜日)は、園部の氏神である宝満神社の神様に実りの秋を感謝して神様をもてなし、園部正応寺のお仮殿までお連れする御神幸の日。本町は、明治22年(1889)に宮浦村、園部村、小倉村、長野村の四村が合併して基山村となったが、そのうちの旧園部村の人々でこの祭りは続けられてきた。

大祭当日の早朝、お旅所であるお仮殿まで御神幸し、その日の午後、本宮である宝満神社へ戻られる行事である。わずか約150m弱の行程であるが、『元禄絵図』に描かれる道沿いの昭和初期建築の農家住宅や稲穂垂れる田んぼの風情の中、芸能奉納者の所作や御神幸の道に集う集落の人々の様子に、一年の五穀豊穡に対する感謝を表す農耕祭事の姿を見ることができる。

①園部くんちにみる歴史的風致に関わる建造物と町並み

ア) 園部くんちにみる歴史的風致に関わる建造物

【宝満神社】

宝満神社は、正徳6年(1716)の『基肄郡上郷神社記録』によると、天武天皇4年(676)の創建で、大宰府の竈門神社から勧請したと言われている。神殿は、三間社流造で向拝通し一間の銅板葺きの建造物で、明治7年(1874)建築とされる。(『基山町史資料編』平成23年(2011))



写真 宝満神社

【後藤家住宅】

園部の神が神幸される道沿いに建つ農家住宅で、現在の当主（昭和4年生まれによると、近接する町内の皮籠石集落にあった庄屋屋敷を昭和初期に移築したと伝えられる。寄棟造りの草葺き屋根で1階を住空間とし、屋根裏部屋がある。周囲を水田に囲まれており、平地に造られる本町の農村景観を形づくる貴重な建造物である。



写真 後藤家住宅

【立花地藏尊】

町内に伝わる「ハツ並長者伝説」にまつわる地藏尊で、室町時代造立とされる。（『基山町史下巻』平成21年(2009)）花崗岩製地藏菩薩像が、杉木立に囲まれた中に立っており、ハツ並長者の叔母の家にあたる立花家がこの付近にあったと伝えられている。立花の叔母は子宝に恵まれ、集落の子等も我が子同様に育てたという。このことが転じて、この地藏尊の周囲に植えられている杉の葉を燃した煙に、子の尻をあぶると夜泣きが治まると言い伝えられ別名「夜泣き地藏尊」ともいう。この伝承とともに、園部くんちの催行者たちにとって大事な地藏尊として大切に守られてきている。



写真 立花地藏尊（遠景）



写真 立花地藏尊

イ) 園部くんちにみる歴史的風致に関わる町並み

都市化が急速に進む木山口町とは異なり、周囲に田畑が広がる田園景観の中、脊振山系から張り出した丘陵端部に園部の宝満神社が鎮座する。この宝満神社南側に接する町道高島・小原線を御神幸の道とし、田の中を通る道路沿いには、催行時には黄金色に色づき稲穂垂れる田んぼの中を御神幸の神輿が通っていく。その催行の道の南には、昭和初期建築の後藤家住宅が接して建っており、園部くんちにみる歴史的風致を形づくっている。



図 園部くんちの御神幸の道

②園部くんち

宝満神社秋の大祭である園部くんちがいつから始められたのかは定かではないが、『基肄郡上郷神社記録』によれば、慶安4年(1651)に再興され、神伽^{じんが}二十二人で行われたと記されている。神伽とは、祭礼の世話をする人で、庄屋や豊かな家が選ばれていたようで、現在も18人の神伽と宮総代でその仕事を引き継ぎ、しめ縄の稲藁の手配、しめ縄作り、祭りの前日の幟旗立て、しめ縄掛けなどを行っている。また、奉納芸能の一つ、御鉄砲^{おてっぽう}の祭具箱の蓋裏書に「文政五年(1822)」と記載されていることから、江戸時代文政年間まで継続され、さらに現代まで受け継がれたきたことがわかる。これらの道具類を使い、園部の宝満神社近傍に住む氏子たちを催行者として園部くんちは執り行われている。



写真 祭具箱書き(文政5年銘)

大祭当日、秋の深まりを感じさせる10月17日の早朝、園部の宝満神社とお仮殿を結ぶ道に立つ幟や屋敷を80年以上も前に移築された後藤家住宅などに朝日が差し、これから行われる御神幸の賑わいを待ちわびるかのように沿道の稲穂の群れが揺らいでいる。また、この沿道から少し北側の杉木立に座す立花地藏尊も間もなく催される祭を見守っているようである。

薄暗がりの宝満神社境内には、催行者たちが互いの姿を確認し合い、笑顔の中にもこれから行われる御神幸の無事を願う緊張した空気の漂いを感じる。

「お弓ー。」 「お鉄砲ー。」

澄んだ空気に包まれた境内に声が響く。明治7年(1874)建築の社殿下に待っている道具の運び手に、神殿から神職や、お世話の方が道具を渡している声である。

弓やお鉄砲を受け取るのは、小さな小学生の男の子。だぶだぶの衣装を身に纏^{まと}い、道具を肩に担ぐ。挟箱や羽熊を持った人たちは軽く神殿前で演じ、安永9年(1780)寄進の石製鳥居を出て道に並んでいる行列に加わる。神楽の係の笛の一团は、温めて音を出すため笛を羽織の後ろ襟の中に突っ込んでいる。また、朝には昔から伝わる、唐辛子がたくさん入ったコンニャク料理を食べる。これも辛さで笛を吹きやすくするためと言う。太鼓と笛の音で神様がお神輿^{みこ}に出入りされる。神輿の担ぎ手の身体に宝満の神の重みを感じ、入られたことの確認の合図があるまで、いつまでも吹き続けなければならないという。この笛は正応寺、馬場組合の担当で、10月に入ると公民館で稽古が始められる。以前は17歳になると、青年の仲間入りを許され、この笛の練習を始められたと言う。



写真 祭りを待つ幟



写真 催行のため集まった人々



写真 唐辛子入りのコンニャク料理

鳥居の前には、てっぺんに笹竹が付けられた大きな幟旗が4本立てられている。真っ白な幟旗に迫力のある黒々とした文字が書かれており、祭りに厳かと華やかさを添えている。

すっかり日が昇り、秋の抜けるような青空の下、行列がお仮殿に向かう。150メートルほど東にあるお仮殿までの道を、神水を榊に付けて撒きながら清める二人が先頭に行く。

その後ろを鼻高面、お供物を入れた御供櫃^{みくひつこ}荷やお弓、お鉄砲などが並び、お神輿と神楽が最後を飾る。沿

道の両脇には稲刈り前の黄金色に染まった田が広がり、昭和初期に移築された後藤家住宅や、催行者である地域の人々に大切に守られている立花地藏尊とともに、祭りの歴史的風致を形づくっている。

見物客が並び行列の到着を待つ。行列でひととき目を引くのは羽熊と挟箱である。二人でひとつの道具を担い、「よ～いやし、よいさのしよい」と調子の良いリズムの唄を歌いながら、独特の所作をしながら二人で道具の受渡しを行う。数歩進んでは、後ろにまた下がるといったゆっくりとした歩みで、その様子^{そつきょう}と即興で作られる歌が観客の笑いを誘う。時には道から外れ、田んぼの中を走りまわり、見物客を湧かし楽しませる。そのためにその田だけは早めに稲刈りがされると言う。高校生になって、初めて仲間入りをした演者の恥ずかしそうな、それでいて誇らしげな顔が見える。一緒に演じながらそれを見守る父親の顔。沿道から心配そうに見ている母親の顔。嬉しそうに声援を送る、祖父母や親戚の顔。「あんたんとこの〇〇君、出とんなさるね。おめでとう。」お祝儀を渡す近所の方。



写真 お浄めの神水を撒きながら出立



写真 大名列



写真 神輿



写真 稲穂実る田んぼの中を進む御神幸



写真 田んぼを駆け巡る青年たち

時折、お神輿が止められ、その下を観客が五穀豊穡や無病息災を祈りながら潜る。腰の曲がったお年寄りから、乳母車に乗った赤ちゃんまで、皆が笑顔で神輿の下を潜る。

お仮殿へ程無く到着すると、神職による着御の儀の神事が行われ、神様を載せたお神輿がお仮殿の中へと入る。着御の儀の一連の所作の後、お下りが終わる。



写真 お仮殿（お旅所）に到着



写真 お囃子の様子

午後1時、お仮殿で過ごされた神様が、本宮へお帰りになるお上りが始まる。お仮殿にて発御の儀が神職によって行われると、お神輿がお仮殿から氏子たちの手によって運び出されると、お上り行事の開始となる。お神輿の前には、お下り同様に鼻高面、お供物を入れた御供櫃荷やお弓、お鉄砲などが並び、お神輿と神楽の順で神幸列がつづく。

その間、本宮へお上りするお神輿は、一年の無病息災への祈りを受けとめるかのように神輿ぐりに集まった人々を迎える。手を合わせて祈りながらぐる人々のいつもの姿は、一年の無事を互いに確認できる瞬間でもある。

神を敬い、人が集い、親から子へと受け継がれていく祭りの原点がここにも続いている。

田園景観が色濃く残る園部地域にあって、宝満神社の秋の大祭である園部くんちは、農耕祭事の風情を強く印象づける祭りである。催行路が短いにも関わらず、稲穂垂れる田んぼの中を、御祭神を乗せた神輿や奉納行列が行き来する姿は、沿道にある農家住宅と相まって、園部地区の秋の歴史的風致をつくりだしている。

図 園部くんにみる歴史的風致

2) コモッタキにみる歴史的風致

本町では、毎年11月に行われる行事に「コモッタキ」がある。「カンモドシ」「神もどし」の行事として九州各地で行われ、出雲大社に全国の神様が集う神無月(出雲のみ「神有月」)の行事の一つである。本来は、10月に神送り、11月に神戻しの行事が対をなしているが、11月の行事のみが九州各地で行われ、今では福岡都市圏では多くが失われている行事でもある。

コモッタキは、神無月に出雲大社に行かれた神様を、一晩中火を焚いてそのお帰りを待つ行事で、行事の呼び名は異なるが全国の多くの地域で行なわれていた。本町の神社では、現在では11月の最後の土曜日に行われ、その晩は町中のあちらこちらから炎が上がり、天を赤く染める。その光景を高台から眺めると、あたかも神様がその炎にせかされて出雲から急いで帰ってくる様子が見えるかのようである。

ここでは、子どもたちの行事として原型を今にとどめる小倉老松神社のコモッタキについて記述する。

①コモッタキにみる歴史的風致に関わる建造物と町並み

ア) コモッタキにみる歴史的風致に関わる建造物

【小倉老松神社】

旧小倉村の南に位置し、木山口町から筑後小郡へ続く道沿いにある。『元禄絵図』にも旧小倉村と道は描かれており、その位置から旧小倉村の境界に座する鎮守である。

御祭神は、天満大自在天神である菅原道真公の眷属神である老松大明神で、境内内にはうがやふきあえずのみこと鷲鷯草葺不合尊や瓊瓊杵尊を祭神とする末社がある。社殿自体は、行政区5区の公民館と一体化されているが、境内地を分かつ鳥居は享保17年(1732)寄進の石製鳥居で、その奥には昭和37年(1962)寄進の旗立て石、天保11年(1840)寄進の狛犬が現存している。



写真 小倉老松神社

【『元禄絵図』に描かれる道】

江戸藩政の基礎情報として全国で描かれた絵図で、描かれた時代を冠し通称『元禄絵図』と呼称されている。本絵図は、対馬藩であった旧基肄養父の領地を描いたもので、現在は長崎県対馬市に保管されている。町域の東寄りを南北に縦貫する長崎街道をはじめ、町域を縦横にめぐる旧路が描かれ、緑色で旧集落の範囲も描き込まれている。

絵図に描き込まれた道路や集落は、現在も大きく変更されておらず、コモッタキをはじめとする民間祭事の催行の道も、ほぼ江戸時代から継続された道を舞台に行われている。



図 行政区5区の位置



資料 『元禄絵図』 旧小倉村

イ) コモッタキにみる歴史的風致に関わる町並み

町内各地で行われるコモッタキは、神を迎えるための焚火の薪を調達する山や斎場である神社までの運搬路、さらには祭事に使うお米や野菜、さらにお金を集めにまわる集落内の道や斎場としての小倉老松神社神社が、コモッタキの歴史的風致の重要な構成要素となっている。

いずれも農村景観の中で執り行われ、道や集落の範囲は『元禄絵図』に描かれたものがそのまま継承され、その道々には疫神、どろどろまいりの祠、むかしながらのレンガ塀が今も引き継がれている。神社境内には、大銀杏が今も昔もコモッタキの炎に耐えながら、集う子どもたちを見守っている。



写真 小倉老松神社周辺の町並み

②コモッタキ

「や〜ごんご、や〜ごんご。芋に大根、^{とうみょうぜに}燈明錢。ついでに小豆もく〜れんな。」

中学生の声変わりしたばかりの声が夜の集落内に響く。この声を聞くと、集落の人々は晩秋の訪れを感じ、年の瀬が近いことを知る。

かつては基山の各神社で行なわれていたコモッタキも、時代の流れの中催行するところが少なくなってきた。かつての姿を色濃く残している5区では、男子中学生がリヤカーを引いて、氏神の小倉老松神社でコモッタキをするための材料を集めてまわる。この男子中学生も、かつての高等科2年の流れを踏襲し、現在の中学2年生全員が親頭^{おやがしら}を務めている。親頭は、一軒々々民家を訪れ、玄関でこの唄を歌いお米や野菜、お金などをもらっていく。

昔ながらに子どもが中心となってコモッタキをしているのが5区で、中学2年生を親頭、中学1年生全員をイモ頭^{がしら}とし、以下小学1年までの男の子たちが約1ヶ月をかけて準備をする。まず境内に何日もかけて深さ2メートル、直径5〜6メートルの穴をスコップで掘る。これは小学生の仕事で、大人の手は借りずに力を合わせて掘っていく。何十年も火を焚いた所なので、土に灰が交じり、どの子の手足も真っ黒になっていく。

焚き物は中学生がリヤカーを押して集めてまわり、穴の脇に山のように積んで置く。

境内の大銀杏が見事に染まり、ハラハラと落とす葉で地面をも黄色に染める秋の朝。子どもたちは朝早くから集まり、参拝者に振舞うで馳走を母親たちと作る。集めたお米を白飯と小豆ご飯の2種類に分けて大釜で炊きおむすびを握り、里芋や大根の皮をむき、かしわ(鶏肉)と合わせて大きな鍋で炊いてお煮しめを作る。神様をお迎えする火を焚く大穴に、焚き物を炎が高く上がるように上手に積み上げ、神前にお神酒や供物を供え無事にお迎えできるよう皆で神様にお参りをする。



写真 コモッタキのための穴を掘る



写真 火の番をする子どもたち

午後5時に火が点けられ、中学1年(イモ頭)が叩く太鼓の音が境内から集落内に鳴り響く。焚き物係の高学年が焚き物を次々に放り込むと、炎はみるみるうちに高くなっていく。夜空に火の粉が美しく舞い、火の粉消し係の小学生の4年以下の子どもらが、境内の木々への延焼を防ぐため水を付けた竹を大きく振り回し火の粉を消してまわる。炎は、地元消防団が待機するほど傍らの銀杏の葉を焦がす勢いで高く上る。ドンドン、ドンドン、ドンドンの決まったリズムの太鼓の音に導かれるように、集落の人々がお参りのためにぞろぞろ集まって来る。

「久しぶりやねえ〜」「大きくなったね〜、分からなかったよ。」

などの言葉が飛び交い一気に賑やかになる。その顔も炎で、真っ赤に染まる。



写真 夜空に燃え上がるコモッタキの炎



写真 享保17年(1732)寄進の鳥居を映し出す炎

拝殿では、コモッタキを仕切る親頭の中学2年生が皿に盛ったおむすびやお煮しめをお盆に載せ、一人ひとりにお給仕をする。きちんと正座をして、お神酒を注ぎ、接待をする凛々しい姿に、集まった大人たちも居住まいを正す思いがしてくる。

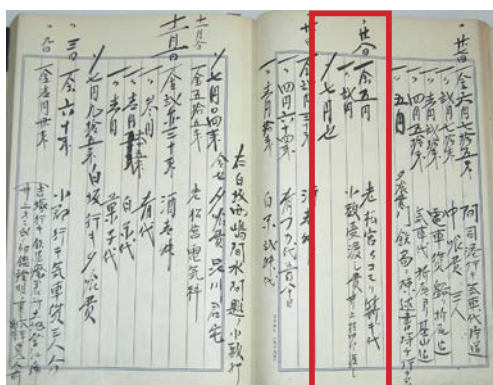
このコモッタキの行事は、記録としては5区が保管している区有文書の昭和17年(1942)の『議事録』に「11月28日 一金5円 老松宮コモリ薪ギ代 小頭受渡し費」として記され、コモッタキのために子どもたちが集めてきた薪木が未使用で余ったため、売り払い



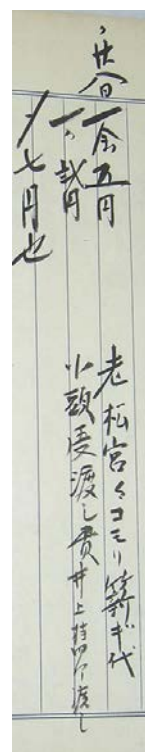
写真 集まった大人を接待する子どもたち

金として区が買い上げた記録が見え、その後の『議事録』にも数年ほど記されている。民間行事は、記録性に乏しく人々の記憶に残るものが多い中で、この『議事録』は今に至るまで長く続けられてきたことを物語る貴重な資料である。

また、明治31年(1898)4月8日に生まれた倉成平次氏の思い出を綴る『基肄養父 きやぶことば』(昭和48年(1973)12月刊行)に、少年の頃(15歳まで(大正2年(1913)))に体験したホンゲンギョウやコモッタキに関する記録が記されている。コモッタキについては以下のように記されており、現在も継続されているコモッタキと多くを共通にし、今も昔も続けられている行事の姿を知ることができる。



資料 議事録 昭和17年(1942)



【原文】

●コモツタキ

霜月の三十日の晩な、お籠りちうち神様が出雲大社から帰つちきなさる晩ぢゃけ神待ちうちお宮の前に夜通し火ば燃して絶間ない叩く太鼓ん音と燃上がる火花が彼地此地のお宮から盛んに聞えち来る。こりも子どもん楽しみの一つで、お籠りち云ふと二三日前から家々ば廻って、たきもんばくれなさい芋大根ばくれなさいち云ふち貰ふちさるくと子ども頭は又家族一人に米一合、小豆が一戸に一合、燈明錢が一錢宛抜立其の晩は宮前広場に薪を山と積上げ日暮ば待つて太鼓を合図に火を入ると氏子の人々が、ぞくぞく参拝に来る。そして赤飯の握り飯と芋大根の煮染を貰い迎火の周囲で更る迄語る。子どもは交代で夜通し太鼓ば叩き続ける。親頭ち云ふ子ども頭の命令で一夜を過す。此の親頭が翌年正月に、わきゃもん入りして青年になる最後の子ども頭ぢゃけ、なかなか威張ったもんぢゃった。

【現代語訳】

霜月(11月)の30日の晩に、お籠りという神様が出雲大社から帰って来られる晩なので、神待ちというお宮の前で夜通し火を燃やし、絶え間なく叩く太鼓の音と、燃え上がる火花が、そこそこのお宮から盛んに聞こえてきた。これも子どもの楽しみの一つで、お籠りという二、三日前から家を廻って、「焚きもの(薪)をください。」「芋大根をください。」と言って貰い歩くと、子ども頭は家族一人あたりに米を一合、小豆が一戸に一合、燈明錢が一錢ずつ抜き立ち、その晩はお宮の前の広場に薪を山のように積み上げ、日が暮れるのを待ち、太鼓を合図に(積み上げた薪山に)火を入ると、氏子の人たちが、ぞくぞくと(お宮に)参拝に来られる。そして、赤飯の握り飯と芋大根の煮つけを貰い、迎え火の周りで(夜が)更けるまで語る。子どもは交代で夜通し太鼓を叩き続ける。親頭という子ども頭の命令で一夜を過ごす。この親頭が翌年正月には、若い者に仲間入りして青年になる最後の子ども頭なので、なかなか威張ったものだった。

倉成平次『基肄養父 きやぶことば』昭和48年(1973) 73頁

③まとめ

晩秋の夜、町内各地にのぼるコモツタキの炎と、子どもたちの声々に、秋の深まりを感じつつ、「出雲国」から帰られる地域の神々に一年の無事を感謝する。凜とした寒さの中に立ち上る炎に、基山の晩秋と年の瀬を迎える風情を感じる。

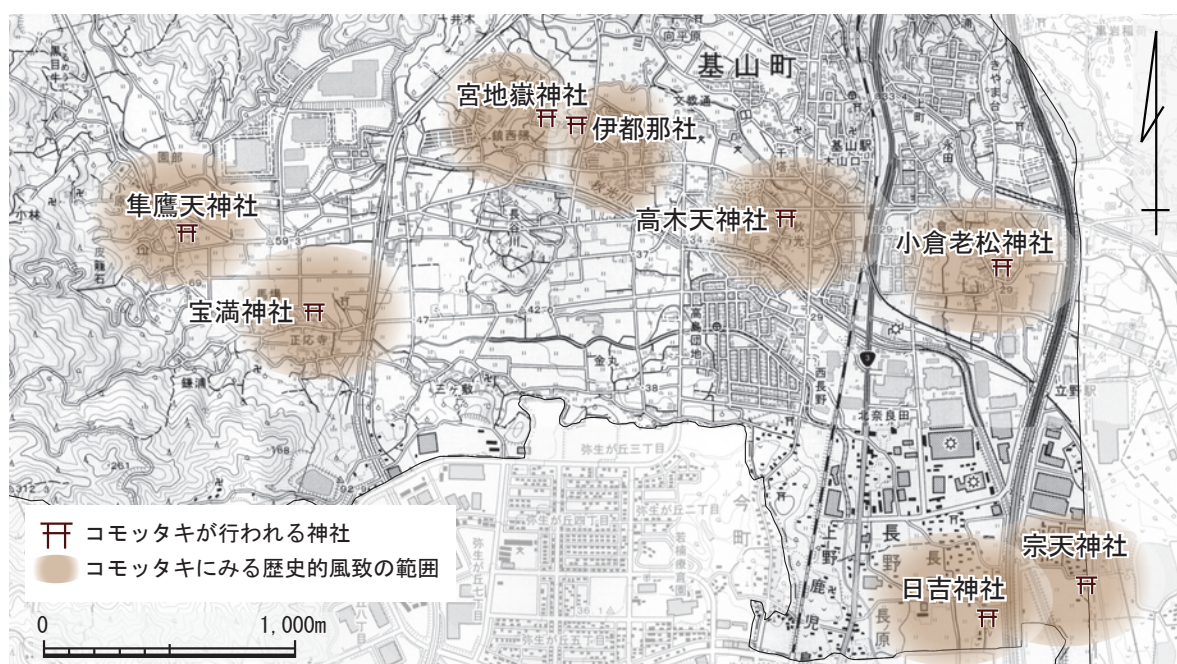


図 コモツタキにみる歴史的風致

3) ホンゲンギョウにみる歴史的風致

本町では、一年を通して様々な民間行事が、お宮の祭事、家々のお祀りとして行われている。JR基山駅前や国道3号沿いに広がった宅地開発によって町外からの転入者が増え、都市化が進んだことを受け、催行する集落が少なくなっているが、近隣自治体と比較すると、まだかつての姿をとどめ継承されている姿に、本町の人々の伝統的文化を大切に継承する心の強さを感じることができる。

その中でも、ホンゲンギョウやそれに附帯して執り行われる諸事は、未だ多くの地区で取り組まれ、催行時に町の所々に立ち現れる、その様子は本町の貴重な個性をつくりだしている。

1月1日元旦から7日までの正月行事に終わりを告げる行事には、ホンゲンギョウがある。これは、正月に迎えた年神を1月7日の早朝に、火を焚いて見送る行事である。

ホンゲンギョウの歴史は、町民が主体となって行っている年間行事に関する記録が残りにくい中、倉成平次氏の想い出を綴った『基肆養父 きやぶことば』に見ることができ、倉成氏の少年の頃(15歳まで(大正2年(1913)))に体験したホンゲンギョウに関する記録として貴重である。この記録では、「村道の真中」で行っていると記されており、今は2区や7区などの限られた場でのみ行われているホンゲンギョウが持つ原型の姿を知ることができる。

【原文】

●ホンゲンギョウ

(1月) 七日ん朝んホンゲンギョウも嬉しかった。まあだ、まつくら朝ボンボン竹んはしる音んし出すと子どもまぢみんなはね起きて村はずれに出ちいくと、霜ん真白か道の真中に藁と竹ばうんと小積うでボンボン燃し、うちから持つち来た餅はワラビャアなかで、やあち 口端ば真黒すつくる にゃあち 食うとも楽しかった。ようよう夜のあけち、うちい帰ると、そん口端はなんかい、やしぼんごたるち云われち。わりゃあながら、つら、あるうたもんぢやつたが、そん頃は村道の真中で、こぎゃな行事ば、しょおったが、今どんこぎゃなこつしたなら、どうぢゃろかち思わるる。

【現代語訳】

(1月)7日の朝のホンゲンギョウも嬉しかった。まだ、真っ暗な朝にボンボンと竹が弾ける音がし出すと、子どもは本当にみんな跳ね起きて、村はずれに出ていくと、霜で真っ白になった道の真中に藁と竹をたくさん積んでボンボン燃やし、家から持って来た餅を藁灰の中で焼いて、口の端を真っ黒にして(餅を)食べるのも楽しかった。ようやく夜も明け、家に帰ると、「その口端はどうしたのか? いやしん坊のようだ」と言われて、笑いながら顔を洗ったものです。その頃は、村道の真中で、このような行事をしておったが、今、このようなことをしたら、(このようなことをする人は)大丈夫だろうかと思われるだろう。

倉成平次『基肆養父 きやぶことば』昭和48年(1973) 73頁

①ホンゲンギョウにみる歴史的風致に関わる建造物と催行の場の環境

ア) ホンゲンギョウにみる歴史的風致に関わる建造物

【寺崎家住宅】

各家ごとに執り行う年中行事の伝統を守る寺崎家は、本町南西部の黒目牛^{くろみうじ}地区にある。大正年間建築の農家住宅で、木造二階建ての屋根は入母屋造り、平入り部分に玄関を有している。この主家とは直交するように農業用倉庫が建ち、建造物群の一段下に田んぼが広がっており、この田の中でホンゲンギョウが催行される。



写真 寺崎家住宅

【城戸老松神社】

城戸老松神社は、基肄城跡水門から流れる筒川に面する旧城戸村集落の中央に位置している。境内は、昭和7年(1932)に造られた頑丈な石垣で囲まれ、その下を豊かに流れる川に掛かる石橋を渡って境内に入る。祭神は老松大明神(菅原道真公)他5社。(57頁参照(信仰の山・基山にみる歴史的風致))この境内で行われる1月のホンゲンギョウの際に燃やされる。ホンゲンギョウは、境内東側の広場で行われ、銀杏の大本が見守る中、正月の引き締まる寒さを打ち破るように、天高く炎が立ち昇っていく。



写真 城戸老松神社

イ) 催行される場の環境

ホンゲンギョウは、新たな年を迎えるにあたり、家々に迎えた年神を1月7日の早朝に天へお返しする行事で、陰から陽へ転じる夜明け前に火付けが行われ、夜明けをはさんで催行される。元来、黒目牛集落の寺崎家住宅のように各家々の田んぼの中や玄関先で執り行われていた。それがいつしか数軒が「辻」と呼ばれる三叉路に集い正月飾りを焼く行為へと変化し、最近では城戸老松神社などのように地域の神社や公園を舞台に催行されるように変化してきている。ホンゲンギョウ催行の様子は、町場景観ではなく多くの地域で農村的景観の中で執り行われている。

②ホンゲンギョウ

ア) ホンゲンギョウ

ここでは、町内各地で行われているホンゲンギョウの例として、原型に近い黒目牛地区の寺崎家でのホンゲンギョウと、現在多くの地域で行われている集落ごとのホンゲンギョウとして城戸老松神社のホンゲンギョウを取り上げる。

【個人宅でのホンゲンギョウ】

○ヤグラ組み上げ

ホンゲンギョウを催行する家々や集落では、催行日前日までに、近傍の山の竹林から竹が切りだされ、催行場である田んぼや神社・公園に持ち込まれる。

個人の家で行っている黒目牛集落の田んぼでは、竹やぐら基礎には、木材が置かれ、その上に稲藁、笹が着火剤として重ねられる。その後、切り出してきた竹が切り分けられることなくそのままやぐら状に組まれていく。高ければ高いほど良いとされ、太い竹で高さのある竹が組まれていく。

この竹やぐらの高さや太さが好まれるのは、年末に家々に迎えた年神を、天に返す意味から高さが求められている。またやぐらが燃える際に弾ける音で、陰から陽への転換を意識づける。そのために節々に空気をたくさん蓄えた太い竹が用意されている。



写真 ヤグラ組み上げ作業の様子

○火入れ

1月7日当日、夜明けぬ午前5時に、前日に立ち上げた竹製のやぐらのまわりに人々が手に手に正月飾りを持ち集まり始める。口々に新年の挨拶が交わされ、新たな年への無事を確認し合い、暗いながらも互いの気持ちを明るくさせていく。

黒目牛地区の寺崎家では、午前5時30分、やぐらに火が入られる。火付けの位置はあらかじめ決められており、火付けにふさわしく稲藁を置き、その上に竹笹が置かれている。着火と同時にいつきに炎が立ち昇り、一面明るさと温かさが包む。参集した人々は、正月飾りをやぐらの周りに置き、立ち昇るやぐらの炎とともに、年末に家々にお迎えした年神を天に返す。

黒目牛地区の寺崎家の方が言うには、

「村一番にボンという音をさせんといかんとです。」

「お父さんは前日から竹を切り出してきて、それはそれは見事に組みなさんとよ。」

と話してくれたように、個人で続けているところも多く残っている。



写真 寺崎家住宅(大正期建築)の前の田んぼで燃え上がるヤグラ

【城戸老松神社でのホンゲンギョウ】

基^き山東麓^{さんりふ}の城戸の老松神社の神殿前で行われるホンゲンギョウは、子どもクラブの親子が前日に井桁にくみ上げた木材とそれを囲む竹に火が点けられ、高く燃え上がる。次々と神社の四方から正月飾りや、古い御札などを持って町民が集まって来る。どの人もまずは神殿にお参りをし、神さまに挨拶をした後、炎の中に正月飾りなどを放り込み、回りの人々と新年の挨拶をする。いつもは作業服のおじいさんも、今日はさっぱりした服装で、お尻を火に当てて暖をとりながら話をしている。



写真 城戸老松神社のホンゲンギョウの様子

「近所でもなかなか会わんけんね。」

「元気やったですか？」

その表情はいつになく晴れ晴れしい。子どもたちは葉っぱや木切れを拾っては、熱さに眉毛をしかめながら炎に放り込み、その燃える様を見つめている。時折パチーンと竹が弾けて火花が四方に飛び散ると、「うわー」と歓声を上げて後退りをする。

神社や公園で行われているホンゲンギョウでは、書初めの書をやぐらに入れ、天にかえる年神さまに願いを託し、腕前向上を願う子どもらもかつてはいた。

集った人々の願いを天につなげるかのように火の粉が高く舞い上がる。そして、早朝の静けさを破るように竹が「ポン、ポン、パ〜ン」と弾けていく。バチバチ、パチッ、パーンパチン。遠くからでも分かる大きな音。竹の弾ける音が響く。暗闇に赤々と燃える炎が、新年の澄んだ空気を切り裂いている。集落のあちらこちらから音がし始め、煙が上がる。時には、耳をつんざくような音に、集った子どもらは驚き、それを見守る大人の笑声があたりを和やかな雰囲気にする。

木が燃えるにおいに交じって小豆を炊く良い匂いも境内に漂ってきた。子どもクラブのお母さんたちがお盆にぜんざいの椀を載せて運んで来る。寒さにかじかんだ手を椀で温めながら、甘いぜんざいをほおばると身体も温かくなる。

本町も都市化が進み住宅が密集した国道3号沿いでは、ホンゲンギョウを催行することが困難となり、環境問題も拍車をかけ、次第にホンゲンギョウを断念する地域が多くなってきている。

国道3号から一歩周辺に足をのばすと田園風景が広がる本町では、少なくなりつつはあるものの、各地にホンゲンギョウが催行されており、そこかしこでホンゲンギョウの炎が立ち上り、竹の弾ける音があたりにこだまする。

この行事がいつから始まったかは分からないが、本町に大正13年(1924)に生まれ育った松野孝則氏の著書『思い出すままに』（平成6年(1994)）において、幼少時のホンゲンギョウの思い出を、今と変わらぬ風景で書き残しているように、長く今に大切に守られ続けている正月の風情である。

イ) きんどの守り

寺崎家の田んぼでは、ほどなく、このホンゲンギョウの立ち昇る炎に、細めの竹が入れられ、家々の入口を守る「きんどの守り」がつくられる風習も残る。

きんどの守りは、家々に魔物・災いが入らないように立てられるもので、細めの竹の節々間が「パン」と弾け、弾けた箇所を手際よく曲げ、きんどの守りの三角形が形作られていく。鬼の目のごとく睨みをイメージさせた形とされ、一つまた一つと手際よくつくられていく。年神を送る神聖な火で作られることで、一年間の災いを家々に入れない守り神の意識が投入される。

やぐら横に立てられたきんどの守りは、家人によって家の門や裏門である城戸(木戸)に立てられ、一年前に立てられたきんどの守りと入れ替えられる。その形が三角形を呈していることから、鬼の睨みを形づくっているとされ、災いを睨み目で脅し入り込むのを防いでいると伝え聞く。

集落の入口に立てられ、災いを掃き出す疫神と共に、災いが生活の場に入り込むのを防ぐ役割がある。一年前に立てられたきんどの守りは、やぐらの火の中に入れられ一年の感謝とともに天に返される。

午前6時には、竹の弾ける音に混じって、大興善寺の梵鐘^{ぼんしやう}が時を告げる鐘を打つ。初春の静けさに響く鐘の音は、早朝のすがすがしさと相まって、新年への新たな気持ちを湧き起こさせてくれる。竹の弾ける音、大興善寺の梵鐘の音に起こされたのか、鶏の鳴き声も混じり、「朝」を体感する。やぐらが燃える匂い、竹が弾ける音、梵鐘の音、鶏の声が聞こえ、そして次第にあたりが日の出を告げるように白み始め、視覚として「朝」を感じはじめる。集った人々の顔々が次第に見え始め、馴染みの顔、初めて出逢った顔を、この時はじめて確認する。しかし、不思議なことにその時には、ホンゲンギョウを共に催行した仲間として、初めて出逢う顔々も連帯感を感じつつやぐらの火を囲んでいる。

黒目牛地区の寺崎家の方が、

「これは欠かしたことのなかですよ。転勤で私が東北に行きとった時は親父がしよったです。」と話してくれた。このきんどの守りを立て続けている家は、本町でも少なくなってきたが、敷地内の入り口に立てられている家を見ると、この家は一年間守られているんだという安心感と羨望を感じる風景である。

日の出を迎える頃、やぐらの火は次第にオキ(消し炭)状態となり、時折、周囲に散らばった竹箆を入れると炎が立ち昇るが、年神を送った後の余韻を感じさせるように、めらめらと赤くゆらめく。



写真 きんどの守り製作の様子

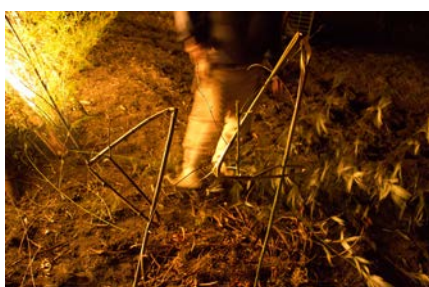


写真 作り上げられたきんどの守り

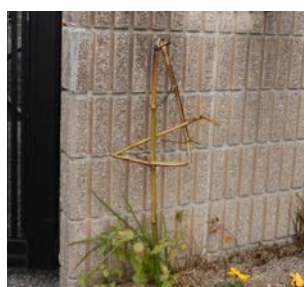


写真 家々の守りとして置かれたきんどの守り

ウ) 荒神さまのお餅焼き

荒神さまのお餅焼きは、個人宅、集落の別なく、ホンゲンギョウが催行されるところでは、多くの場所で行われている。

荒神さまのお餅焼きとは、炊事場・竈の神として知られる荒神さまへのお供えものであった鏡餅を、ホンゲンギョウのオキとなった炎であぶり、やや焦げ目のついた餅を家々に持ち帰り、家族で分け合って食べる風習である。神聖な火であぶった餅を食すことで、一年の無病息災を願う気持ちが込められている。

基^き山東麓の老松神社の神殿前で行われるホンゲンギョウでは、ひとりのご婦人がお餅を三個、くすぶる火の中に入れた。それを見ていた子どもが、

「何でこんな時に餅ば入れるとー?」と聞く。

「あら〜知らなかったとね。これは荒神さんの餅たい。これをホンゲンギョウの火で焼いて食べると病気をせんと言われているとよ。」

「ふ〜ん。」

ご婦人は、木の枝で表面を焦がした餅を取り出しアルミ箔に包んで、「家族で食べます。」と大事そうに持って帰った。

また、黒目牛地区の寺崎家では、残り火の中にサツマイモも投じられ、焼き芋として参集した人々へと配られる。残り火の遠赤外線によって甘味を増した芋の甘さは、集った子どもたちのみならず大人たちも舌鼓を打つ。早朝の寒さを忘れ、集う人々の笑顔、しらみ始めた朝の風景、やぐらの炭の匂い、大興善寺の鐘の音、鶏の声、様々なものが交じり合い、最高の「調味料」として焼き芋のうまさを引き立てる。

やぐら材がすべて燃え、すっかり明るくなった午前8時頃、ホンゲンギョウは幕を降ろし、参集した人々の口々に、「また、会いましょう。」「また、来年。」の言葉が交わされ散会となる。残り火は、そのまま夕刻まで^{くすぶ}り消えていく。



写真 焼かれたお餅

③まとめ

正月行事に終わりを告げるホンゲンギョウは、町域に上がるホンゲンギョウの炎の柱と朝日が入れ替わり、新たな年の平穏無事を願う町民の日常生活の始まりを告げている。また、その時につくられるきんどの守りは、各家の守り神として、新たな生活に入る本町の人々の心の支えになるとともに、本町の家々の表・裏の姿を形づくる重要な文化遺産となっている。

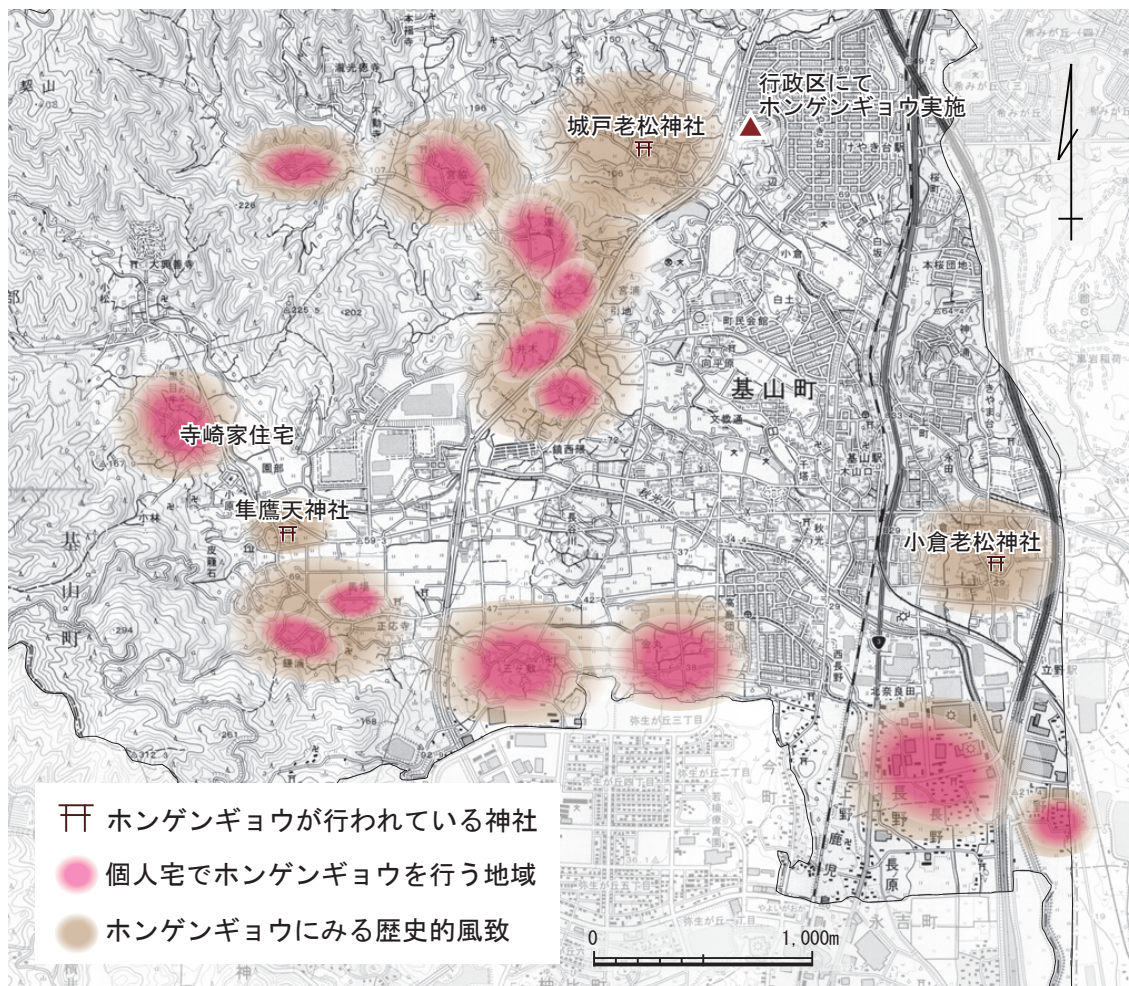


図 ホンゲンギョウにみる歴史的風致

(3) おわりに

これらの行事を通して、町民がこの伝統を続けている誇りと、地元を愛する心を育んでいることを感じる。また、家族や親戚、久しぶりに会った近所同士や知人が言葉を交わし、旧知を温める場となり、コモツキに見る親頭をはじめ子どもたちがそれぞれの役目を立派に果たしている姿に、地元の宝である子どもたちの成長を喜ぶ日ともなっている。

福岡都市圏に入る本町ではあるが、江戸から昭和前期に建築された農家住宅や社殿、そして『元禄絵図』に描かれる道や田んぼなど農村景観を今なお多く残し、そこそこで農耕祭事が神社と町域を舞台に多世代の氏子たちによって執り行われ、季節の節目を物語る歴史的風致をつくりだしている。

地域で行われる民間行事は、歴史的農家建築や『元禄絵図』に描かれる道路や水路などを舞台や背景として執り行われ、時の流れと社会の変化によって大きく変容してきているが、村落的つながりを残す地域では、かつての姿をとどめ、人々の絆を確認するように本町のむかしながらの歴史的風致が今に受け継がれている。

